

涅槃衣について

一、涅槃色どんな色？

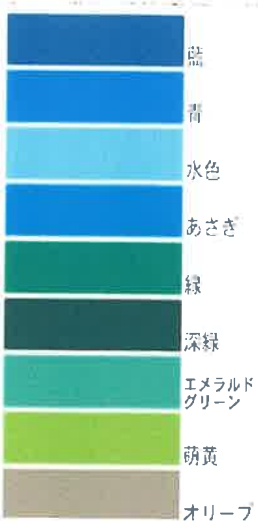
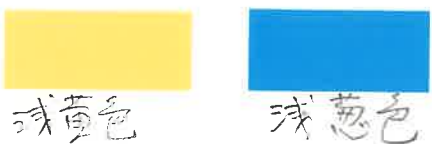
湯灌後、白衣を着せて布団の上から涅槃衣をかけて、袈裟と坐具は枕元に。

※ 涅槃衣とは大衣のことである。日没直後の色を涅槃色という。強いていえば浅黄(あさぎ)色である。

※ 黄黒色、薄藍色、みずいろ、空色ともいう。新亡に着せる衣。特に葬儀にあたって亡僧に着せる衣体をいう。涅槃衣ともいう。亡僧には白衣、黒衣(直綴)をつけるが、袈裟をつけるかどうかについては賛否両論がある。

涅槃衣
↓
木桶の色
↓
陽がしずむ色

令和元年十二月十六日 於加茂法話会



ねずみ色(ほく)

涅槃色即黒色也。黒色是衆色合成也。所謂白色は無相法界之體寂靜安樂。是即息災用也。亦是勇勤大菩提心。

即降伏用也。黄是金剛不壞萬徳。即増益用也。青是无相法界大空也。無具如上三部衆徳。黒是平等法界大涅槃作寂平等應用。(大日經疏妙印鈔 (No. 2213 有範紀) in Vol. 58)

二、枕元には経机に白い打敷をかけ華燭、線香、香炉、小磬、木魚(小)。

三涅槃衣について

- ① 僧を葬る際に着けさせる法衣のこと。
- ② 僧を葬る際に遺弟などが着ける鼠色の法衣のことを涅槃衣という。
- ③ 袈裟に、その功徳が具わっていることから涅槃衣ともいう。
「大徳、你、衣を認めること莫れ、衣、動ずること能わず。人能く衣を著けるに、箇の清浄衣有り、箇の無生衣・菩提衣・涅槃衣有り、祖衣有り、仏衣有り。」 『臨濟録』

現行の『曹洞宗行持軌範』では、尊宿葬儀の場合に、その遷化した尊宿に対し、新衣と袈裟を着けて葬ることが指摘されているが、その袈裟を涅槃衣と通称する。なお、一部ではその袈裟は九条以上の麻衣にすべきとの見解もある(斎々坊『曹洞宗の法式』第四巻参照)。

この涅槃衣の習慣は既に、江戸時代には行われていたようだが、面山瑞方師は強く批判している。尊宿も亡僧も、共に五條の掛絡を掛けて、入龕にて茶毘掩土共にかけてながら焼、又は埋もするなり。このこと清規にあるゆへに、禅家の律に暗き人謂ふは、五條を焼き埋むからは、七條九條も同じ三衣の一例なれば、とてもこのことに三衣を新たに製りて、涅槃衣となすべしとて、洞家(このころ尊宿の作法の様になれり。甚しきものは、絹袈裟は焼難とて、麻袈裟を製もあり。これは先づ、五條を掛るからが根本非法にて、禅規の疏忽(ソコツ・ないがしろにする、うっかり間違う)なり。(中略)末世の僧を、仏制に背しめて、焼衣の罪作る本となれり。『考訂別録』巻七「亡物考訂」

『仏祖統紀』三三には亡僧を火葬にするとき袈裟を掛けるのは焼衣違律の過(正蔵四九・三三四上)とする。